

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.232

ISSN 2432-5295

種を蒔く

C O N T E N T S

◆【種を蒔く】…01～04

・種を蒔く 土壌と施肥、そして育つ ・シーズと
ニーズが息づく直売所 ・アルパック 30 年生
の卒業―「地域に種を蒔く」から「若者に
種を蒔く」― ・酒と都市のミッシングリンク
・種を蒔く、だけでは足りない ・種は吊るされ、
入浴する ・自分で蒔いた種

◆今、こんな仕事をしています…05～08

◆近況&イベントのお知らせ…09～10

◆まちかど…裏表紙

・トイレだってりっぱな観光資源

種を蒔く

種を蒔くのは想像力の賜物ではないかと思えます。

芽が出て、花が咲き、あるいは実が成る。そんな蒔いたあと
の未来を思い描いた想像的な行為だからです。

ところで、未来が想像できるのはほぼ人間だけだと言われています。想像力があるからこそ花や実を楽しみにし、またうまく芽が出るか心配もする。種を蒔くのは人間的な行為でもありますね。

今号では「種を蒔く」というテーマに対して想像性と人間味豊かな報告が寄せられました。

レターズアルパック編集委員会



左から、メモワールビル（主任・前田）
京セラ本社、パルスプラザ（主任・北条）

種を蒔く 土壌と施肥、そして育つ

三輪泰司：
名誉会長

皆さん「京都ファッション産業団地」を、ご存知でしょうか。なんとまあ、大きくなって。97メートル。京都で最初の超高層ビル、京セラ本社ビルです。

「種」が蒔かれた

蒔かれた土地は、伏見西部土地区画整理地区。蒔かれた時は1963年2月1日。この日、室町の繊維問屋が「洛南地区開発組合」設立。中小企業ばかりでした。河野卓男理事長の「河与」も呉服問屋で、室町四条の本社は、木造2階建。上履きに履き替えて上がるといった具合。ところが、1950年代、産業構造が、ひたひたと変わってきていました。大規模な戦災を免れた京都へ、企業が押し寄せ、創業が相次ぎました。立石電機（48年）、ワコール（49年）。堀場製作所（53年）、ローム（58年）。1959年4月、7人で創立した「京都セラミックス」も町工場でした。電気・機械が、繊維・染色に代って、リーディングインダストリーに育っていたのです。生活様式の変化で、繊維・染色も変わってきました。和物に代って洋物へ。「河与」は呉服からシヨール、パラソルへ。社名もブランドの「ムーンバット」へ換えました。

新天地で「発芽」

商品の力さが、飛躍的に大きくなり、室町通りはトラックで

渋滞。そのような時、1960年3月、伏見鳥羽で、区画整理の都市計画決定。区画整理は「都市計画の母」と言われますが、土地の形質を変えるだけ。「ウワモノ」に弱い。時の松嶋助役が、河野さんらに「ささやいた」と思召せ。この辺を買っておいてくれないか」と。モチベーションが合体しました。都市計画技術という肥しを与えるプロジェクトになりました。

組合が買った土地を市が集中換地する。換地されたスーパードロップを「組合減歩」で中央道路をつくり、組合員を配置する。「感応」するように動き出し「芽」が出たのです。

1968年10月、組合に任命された「技術顧問」のお仕事です。組合は名前を「繊維産業団地」へ、更に「ファッション産業団地」へ替え、通称名「京都ファッショントウン」と「三ヶ条の憲法」を決めました。

（概要）

- ①京都市の都市計画に従う。
- ②土地を投機の対象にしない。
- ③組合員の平等・互恵の精神を貫く。

「花」が咲く

「団地」の性格・機能が変わってきました。物流・配送から、展示・集会へ。1987年4月、準組合員・京都府総合見本市会館（パルスプラザ）竣工。11月、

世界歴史都市博覧会会場です。団地に「ハナ」が咲いたのです。続いて、研究・開発へ。中枢管理機能へと進むはずが、既存の「都市計画」とぶつかりました。組合は、田辺市長へ都市計画の見直しを要望しました。準工業地域を、日影制限のない商業地域へ、同時に団地全てに「地区計画」を。かくて、1998年8月、京セラ本社竣工。区画整理事業のむすびは、地名・地番の変更。団地は「竹田鳥羽殿町」です。11世紀、白河上皇の院御所の跡です。

「メモワール」

以来、24年が経ちました。組合員の顔ぶれは、変わりました。1994年1月に竣工した「メモワールビル」は、共有資産で、組合員企業社員のための福祉施設があります。組合は、今も任意団体です。ビッグモスモールも対等平等、一人一票のアソシエイツなのです。メモワールビルは、組合創立から60年の「記憶」を刻んでいます。

2003年6月18日「技術顧問」の職務は、個人からアルパック（社長）に代りました。約35年、三輪泰司、斎藤侑男、北条誠、前田怜嗣、松尾高志は、京セラ、パルスプラザはじめ、組合の皆さんとともに、「若造」から「ベテラン」へ育ってきたのです。

シーズとニーズが 息づく直売所

小阪 昌裕：
公共マネジメントグループ



「蒔く」には「時」が入って
おり旬やタイミングが大切で、
種を蒔き、水や肥料をやり、育
て収穫する、その結果が農産物
です。

コロナ禍の中で、身近な暮ら
しに目を向けると徒歩圏で発見
があるかもしれません。自宅か
ら徒歩圏内には知名度のある
スーパーマーケットが5軒ほど
ある一方、旧街道沿いには町家
のミニ直売所があります。他所
にも春はタケノコの臨時予約販

売所（本業植木屋のガレージ）、
夏にはブドウ販売農家（門内の
中庭）もあり、近場で四季折々
の旬物が手に入ります。

旧街道沿いの町家では近くの
畑から採れる自家用の旬の朝採
れ野菜とその手づくり加工品を
販売しており、安全で安心して
安価に入手することができま
す。ちなみに寒中の日には、写
真の品以外の丸大根や水菜も並
んでいました。いつもは「無人」
ですがタイミングよく対面販売

風景をショット
後、自分で料金
入れに硬貨を音
が出るように落
とし込み、目的
の日野菜漬けを
ゲットしました。

この直売所か
ら、消費者が何
を求めているの
かを肌で感じな
がら、身近にあ
る資源等を地域
に役立つように
生かす、シーズ
とニーズの息の
あわせ方のヒン
トをもらいまし
た。

アルパック 30 年生の卒業

ー「地域に種を蒔く」から「若者に種を蒔く」へー

原田 弘之：
地域産業イノベーショングループ

この2022年3月末で卒業
させていただくことになりました。
長い間、本当にお世話にな
りました。この場を借りてお礼
を申し上げます。

かつて「アルパックは学校
だ」と言う先輩がいました。私
が30年前にアルパックに入社
して思ったのは、給料をもら
いながら地域の調査・研究が
できるなんて、なんと魅力的
なんだ。それまで大学の研究
室で似たようなことを授業料
を払ってやってきたので、びっ
くりしたものです。

少し振り返ると、入社当時の
1990年代はバブル崩壊後で
また、阪神・淡路大震災もあり、
身近な地域資源の価値が見直さ
れ始め、おもに大都市圏のため
池や水路、棚田など農空間を対
象に、市民等の参画で魅力的に
再生・活用する仕事に多く関わ
りました。2000年代になると、
人口減少社会の先端を行く
地方部において、農村振興や多
自然居住、集落再生、田園空間
博物館などのキーワードで、地
域に何度も通いワークショッ
プやイベント等を行うことが多
くなりました。2010年代は、
観光立国や地方創生の本格化な
どを背景に、6次産業化、食や
農による地域のブランド化、観
光戦略や道の駅、卸売市場の再

生などに携わり、都市と地方を
つなぎ、多様な関係者が関わる
仕事が多くなってきました。

30年間で共通するテーマは、
「農や食、観光で地域活性化」
でしょうか。微力ながら情熱を
注いできたつもりですが、業務
を通じて地域で学ばせていただ
き、それを他の地域に伝えつつ
（地域に種を蒔く）、地域の方々
と一緒に「種」を育てていこう
としてきました。

「いい仕事」のためには「い
い出会い」があることが必須で、
クライアントや地域の方々、連
携先や社員など本当にいい出会
いに恵まれました。いい出会い
のもとに、いい仕事をするこ
と自体が「学校」であり、1つ1
つの業務（プロジェクト）が学
びの場だと思います。

めざすのは、自分自身やアル
パックのメンバーだけの学校で
はなく、地域の方々やクライア
ントなどプロジェクトに参画す
るみんなが「成長し合えるオー
プンな学校」かなと思っています。

アルパック卒業後は、アカデ
ミアの世界に参ります。まさに
「学校」です。これまでの経験等
も活かし、「若者に種を蒔く」こ
とに力を注ぎたいと思います。
引き続きよろしく願っています。
また、アルパックのこと
もよろしく願っています。

酒と都市の ミッシングリンク

小川直史：
地域再生デザイングループ

自分が種を蒔くというより、自分が気づかずに落とした種を見つけて、そして水をやってくれる人に囲まれて過ごしてきたように感じます。そんな自分です。種を蒔くような意識的に取り組んでいることは特に思い当たりません。ただ、何になるか分からないけれど、なんとなく先の自分に向けて今年から始めたことがあります。

この経験から得られた教訓は、自分にハまるツールを趣味に持ち込むとどんなその趣味が拡張していくということですね。今回でいえば、お酒に「地理」と「記録」を持ち込みました。地理だけ（都道府県くらいの意識で飲む）、記録だけ（メモに飲んだ銘柄を記録）では楽しめなかった（続かなかった）ものが、2つを包含したツールの導入でガラッと様相が変化しました。使い勝手も大事ですし、個人的には不完全な記録（酒の銘柄と飲んだ西暦だけのメモ）であることも大事にしています。不完全な記録の方が、思い出す力学が働いて、その過程も楽しめるからです。

だからだと趣味の話を語ってきましたが、この4月からアルパック4年目になります。既に落ちている種や誰かが落とした種に気づいて、「相乗的に」「創造的に」「統合的に」を指針に仕事に臨もうと思っています。

種を蒔く、だけでは足りない

遠藤真森：
地域産業イノベーショングループ

※ F1 品種：異なる性質・特徴を持つ親をかけ合わせてできた、第一子雑種第一子のこと

みなさんが最後に植物の種を蒔いたのはいつでしょうか。小学校でアサガオなどを栽培したのが最後でしょうか。大人になつて、庭や家庭菜園などで蒔いたでしょうか。その時、種は採ったでしょうか。

「種を蒔く」という言葉からは、「循環」や「持続性」、そしてほんの少しの「無責任さ」が連想されます。

種を蒔くからには、最後には種を採り、そして次にまたその種を蒔くのが自然だと思ってもいいかもしれません。しかし、農業における「種採り」という行為は、今ではあまり見られません。なぜなら、現在流通している作物はほとんどがF1品種（※）で採った種ではうまく栽培できない場合が多いからです。昔は固定品種という採った種からも同じような作物が採れる品種が多かったのですが、育種技術が発達し、経済成長、人口増加と同時に、栽培しやすく、形が揃い、流通させやすいF1品種が急激にシェアを拡大していきま

した。

農家が稼ぐためにF1品種を使うのはある種当然の選択で、それが現在の私たちの食を支えていることは間違いありません

ん。世界人口はまだ増え続けるので、食糧確保のために益々F1品種や育種の担う役割は大きくなるでしょう。ただ、在来種、伝統野菜などの固定種が失われゆくのも防ぎたい。

理由は「その特徴的な味、見た目を楽しめなくなる」、「F1品種の種子は多くが海外で生産されている」、「F1品種の育種にも必要」など、色々あります。特に、「次も良い作物になるように」と良さそうな種子を選抜し、細かな手仕事で種を採り、保存し、栽培する」という、苦勞と想いのこもった長年の循環プロセスと、それに応えてきた植物の存在が途切れてしまうことは、もったいなく、むなしく思

います。

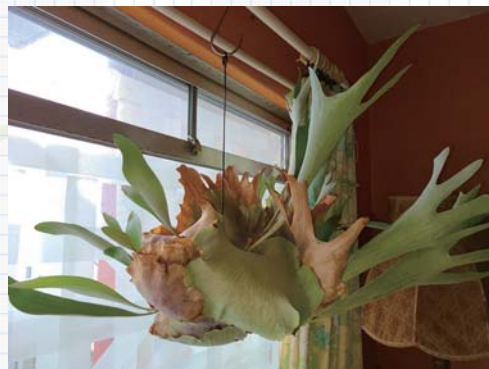
「種を蒔く」からには、成長する環境を整え、結果を見届け、次に繋げていくところまでをセットにしたいものです。農産物の種子でも、地域や人に働きかけるときでも、これは同じように思います。



大学での研究時に地域の農家さんに見せていただいた採種している種子

種は吊るされ、入浴する

木下博貴：
地域再生デザイングループ



3年前から愛知県の渥美半島西端で、これまで地域の商業を支えたショッピングセンターの再生に取り組んでいます。大きな再開発事業等とは違って、地域に即した再生を目指し、地権者はもちろん行政、商工会、まちづくり会社、地元が丸となり、工夫を凝らした小さな種を蒔き続けています。が、今回はこのお話ではありません。

先日、テレビでコロナ禍にあつて観葉植物を楽しむ人が増えていると報じられていました。観葉植物はこれまでも親しまれていますが、現在は、その種類は多く、原産地まで足を運んで買い付けを行うバイヤーもおられるとのこと。自宅でパートナーと共に興味深く見ていました。また、少し話が渥美地域に戻りますが、渥美は野菜だけではなく、ビニールハウスで夜間は電灯を灯し、栽培する電照菊など、植物の出荷も有名です。前述の施設再生と一緒に取り組む電照菊農家の方に先述の観葉植物の話をしたところ、温暖な気候を活かし、近年、東南アジア原産の観葉植物を扱う農家もおられるとのこと。さらに興味深く、身近に感じられました。

そんな折、私が帰宅した際、リビングの天井からヤシの実大の種が吊るされていたので、パートナーに尋ねると、友人で渥美の電照菊農家から譲ってもらったと（なるほど、話はつながるものだ）。コウモリランというタイ原産の観葉植物だそうで、日頃から霧吹きで水をあげようですが、水に浸すことも良いようで、何度か自宅の浴槽で水に浸されているのを見かけます。成長は早く、大きな葉をいくつもつけている姿から、コウモリランと言われる所以がわかる気がします。が、今となれば、愛着もわき、リビングに新しい風景を作ってくれています。

『種を蒔き、水をやる』ではなく、『種を吊り、入浴させる』。まさかの発想ではありますが、まちの新しい風景は、自由な発想とともに地域の歴史・地勢・風土にあつた方法を模索すること、ゆつくりと創出されるのかもしれない。渥美の新しい風景もじっくり考えながらじっくりといきたいです。

自分で蒔いた種

稲垣和哉：
都市・地域プランニンググループ

普段の生活の行動すべてが種を蒔いているようなものだと思うのですが、種を蒔くからにはしっかりと育て、どこかで収穫したいところです。自戒も込めて近頃の行動を振り返ってみます。

終わらない積読

面白そうな本を見つけては、何も考えずにポチーっとしていてのを繰り返しているうちに、気付けば到底読み切れない本が積みあがってしまいました（みなさんもそうではないでしょうか？）。

全てを読み切ることとはとっくの前に諦めているのですが、とりあえず買っておくことで、読む可能性を残す、ということに積読を正当化しています。いつ発芽するか分からない種を蒔いている感がありますが、10年後の自分、あるいはもっと先、自分の子どもに刺激を与えるかもしれないので、積める限り積んでいこうと思っています。

12年で完結する予定のGPS書初め

毎年、お正月にGPSロガーを持ち歩いて、干支を描いています。



南からねずみ [2020]、いのしし [2019]
うし [2021]、とら [2022]

その界限では「GPS地上絵」や「gps drawing」などと呼ばれているのですが、その干支版です（個人的には「GPS書初め」と呼んでいます）。

簡単に見えるかもしれないですが、これが結構難しいんです。事前のルート設定が大事なのですが、今年のとは特に難しかったです。数日悩み、「今年はまだもう無理」と思いましたが、ある街区が耳に見えてからは「とららしきもの」が見えるようになりました。不思議なものです。

やり始めてから今年で4年目、あと8年も残っています。まさに自分で蒔いた種です。8年後どこかで報告出来ればと思います。

公共建築等への木材活用に向けた勉強会 (神戸市) を開催しました



中川貴美子：

サスティナビリティマネジメントグループ

脱炭素社会の要請やSDGsへの対応、森林環境譲与税の創設等を受けて、都市における木材ニーズが高まっています。

2020年度より、神戸市の森林環境譲与税を活用した森林整備実施計画の策定を契機に、神戸市産材の活用や県産材活用に向けた仕組みづくりとして、毎木調査・試験製材・木材コオーディネートや庁内向け木材活用ガイドラインの作成に取り組んでいます。そんな中、公共建築物等への木材活用に向けて、「ただ木材を使う」のではなく、持続可能な森林形成に資する公共建築物、都市建築物とはどのような建物か？を紐解く勉強会を開催しました。

講師には、欧州林産国の動向に詳しく、また、ご自身も森循環に貢献する建築設計をされる法政大学教授網野禎昭氏と都市木造・防火の第一人者であり実践者である桜設計集団一級建築士事務所代表の安井昇氏をお招きし、受講者は、設計士、施工事業者、製材事業者、自治体も森林整備関係者から建築関係者と幅広い方々にご参加いただきました。

両講師の建物から地域社会につながる設計思想や木材の使い



森林整備と活用を進める六甲山材

こなしの視点に触れ、参加された方からは、単に質感や意匠性のためだけに木造に取り組むのではなく、地域や社会、製材歩留まり等までも考えることで、もっと豊かな生活や社会につながるのではないかという感想も聞かれました。

木材活用が必須となるこれからの社会において、地域経済や循環に貢献する木材の担い手づくりや川上・川下連携による木材活用の仕組みづくりに引き続き取り組んでいきたいと思っています。

この業務は、(公財)ひようご環境創造協会およびサスティナビリティマネジメントグループの畑中、建築プランニング・デザイングループの三浦、塗師木が担当しました。

ベトナム人が気に入った熊本県産品は？



ホアン ゴック チャン：

地域産業イノベーショングループ

関西在住のベトナム人を対象に熊本県産品の試食・試飲会を行いました。

熊本県は、県内の加工食料品・化粧品等の海外輸出促進を図るため、今年度は中国とベトナムにおける県産品の輸出可能性品目を調査しています。私はベトナムマーケットに関する調査にお手伝いしました。

調査は輸出側及び輸入側の商社の聞き取りやアンケート調査を実施することがメインですが、ベトナム人消費者の生の声を直接把握することが重要と考え、ベトナム人のグループヒアリングを提案させていただきました。

具体的には、熊本県産品の輸出可能性の高い品目をスクリーニングして、消費者の目線で評価していただくイベントで



試食・試飲会の様子



試食・試飲会で紹介した素材

す。試食・試飲会には在大阪ベトナム総領事館の商務担当領事をはじめ、在阪のベトナム人に出席いただきました。このような機会を通じて、県産品の輸出可能性を把握するとともに、熊本の魅力をもっとベトナム人にアピールすることにつながっています。

試食・試飲会に提供した素材は、馬刺し、球磨焼酎、熊本の日本酒、デコボンジュース、デコボンゼリ、馬肉燻製、天草大王燻製、すねかじり、高菜漬け、肥後太鼓、どれもすばらしいものでした。特に「馬肉燻製」の柔らかさと日本酒の香ばしさは試食した方々に高評価でした。

事前の商品調査では、これ以外にも美味しい食材がいっぱいありました。きっと、日本各地には海外で喜ばれる美味しいものがたくさんあると思います。今後も、日本各地の美味しいものを海外の消費者届くように頑張ります。

地方における人手不足と地方で働きたい人の 想いをつなぐ仕組み

山道未貴：
地域再生デザイングループ



派遣職員が働く飲食店や宿泊施設

熊本県の北部に位置する山鹿市
菊鹿地域は、田園地帯が広がる、
豊かな自然に囲まれたのどかな
地域です。

そんな菊鹿地域で、主要農産物
のワインと栗を核とした地域戦
略の策定をお手伝いしています。

栗やワイン用ブドウの生産
者、活性化施設の管理者、市民
団体、民間事業者、庁内関係課
など様々なキーパーソンのヒア
リングから始まり、会議を重ね、
地域戦略のプロジェクトの立ち
上げを支援しています。

プロジェクトの一つに、様々
な分野で担い手が不足している
背景を受けて、地域の仕事を組
み合わせるにより、安定的
な雇用を創
出する仕組
みとして、
特定地域づ
くり事業協
同組合制度
の活用を検
討していま
す。本制度
は、人口減
少が進む地
域で地域産
業の担い手
を確保する
ため、協同
組合を立ち
上げ、事業
者の人手が
必要な時期

に協同組合から職員を派遣する
仕組みです。熊本県内の第一号
となる熊本県五木村に視察に行
きました。

五木村複業協同組合は、村内
の9事業者（飲食業、農林業
運送業、宿泊業、介護業など）
が加入しています。派遣職員は
現在2名で、1日ごとに職場が
替わり、ある日は、物産館にお
ける販売、別の日は、配達業務
など仕事は多岐に渡ります。地
域で働く職員からは、「毎日異
なる仕事が出来て楽しい」「地
域の方々とのつながりが広がっ
た」といった声や、事業者から
は、「繁忙期と閑散期があり、
人手が足りない時期にお願いで
きるのが良い」「配達など遠方
に行くとはじめに時間が割けな
いため、代わりに行ってもらい
助かる」といったお話を聞き
しました。

最後に、働き手にとっては、
移住へのハードルが下がるとと
もに、複業や半農半Xなど、多
様な働き方・ライフスタイルの
実現などにつながり、事業者に
とっては、人材確保、ひいては、
定着化につながるなど、地方に
おける人手不足と移住希望者や
地方で働きたい人の想いをつな
ぐ仕組みは、双方にとって活気
をもたらす取組ではないでしょ
うか。

※この業務は、原田弘之、武藤
健司も担当しています。

知的障がい者入所施設『横手通り 43 番地「庵」』の 開所から 20 年経ちます

山崎博央：
建築プランニング・デザイングループ



門扉写真：上 改修前 下 改修後

なつながりのもと、ま
ちの核としての役割を
担っていくには、環境
の質も上げつつ、地域
の価値を高めることも
必要だと感じています。
そのために建築で
できることを実践して
いきたいと思っています。

小舎制・分棟型の施設形態は運
営への負担が大きく、理想的で
はあるものの実現が難しい中、
「庵」はモデル的存在として、
20年経った今も全国から多くの
方が視察に訪れています。

アルパックでは基本計画から
設計、工事監理まで行い、その後
継続的に維持管理や改修等メン
テナンスのご相談にも乗ってき
ました。開所後10年以上経過し
たところから外壁や屋根の塗装替
え、空調機器の更新など計画的
に修繕を行ってきており、この
度は内装の改修を行いました。

開所当初は、新しい住まいに
馴染めず、落着かない利用者
もおられ、壁のあちこちに破損
ができ、修繕しては破損の繰り
返しを続けてきましたが、10年
以上が経過し、「庵」の生活環
境と職員の方々の手厚い支援に
より、利用者の方も随分と落ち
着いてきたようです。「障害の
もつとも重い人がその一人ひと
りにあった暮らしができる自立
のための施設をつくらう」とい
う「庵」の原点となる考えが実

壁の改修を行いました。

これまでは壁の仕上げは石膏
ボードの上にビニルクロス
を貼っていましたが、今回は表面
強度の向上と衝撃吸収を兼ね
て、手が届く範囲はビニルクロ
スではなく3ミリのコルクシー
トを貼りました。これにより多
少の衝撃には耐えることと、意
匠的にも新しい雰囲気を生み出
すことができました。また、ま
た当初は少し閉鎖的にしていた
入口の門を、利用者に落ち着き
がでてきたことから、地域から
見ても閉ざされていない明るい
門に変えました。門1つでもず
いぶん雰囲気が変わります。



改修後のユニット内観コルクシート仕上の壁

現できた
のではな
いかと思
います。
そういつ
たことも
あり、今
回傷んで
いた部分
も併せて

おおさか都市木循環プロジェクトを組成、 大阪のまちに“顔の見える地域木材”を

豊福宏光：

サスティナビリティマネジメントグループ

（一社）大阪府木材連合会が事務局を務める令和3年度「顔の見える木材での快適空間づくり事業」支援をし、現在今後の展開について検討中です。

近年、SDGsや脱炭素化の観点から、都市空間における木材活用の需要が高まっています。が「顔の見える木材のサプライチェーンの構築」がされていません。そこで本プロジェクト（以下、PJ）を通して大阪の森林と都市の継続的な循環、そしてそこから生まれる人の繋がりにより「大阪のまちに顔の見える地域木材」が増殖し地域内で使い続けられる仕組みを創っていくことを目指しています。実施団体は、木材流通の川上（木材供給）、川中（製材、木材加工）、川下（建設、マンションオーナー）と事務局に大阪府木材連合会、アルパックはニーズ調査やモニタリング、設計、各種調整を行いました。

具体的な取組としては「丸太の付加価値が高く森林と都市の継続的な循環を生み出す製品群の開発・制作」を行いました。ターゲットは①都市部密集市街地における中小ビルの新築・改修時の導入、②都市部における木育スペース、③都市部まちづくり拠点等における導入です。先ずは、川上・川中と川下のニーズ調査から丸太材のA群（主要材）、B群（端材・風倒木）製品の洗い出しを行い、A群は都市マンショ

ン導入の板材、B群はA群製品のメンテナンスを創出するための都市シェア製品と位置付けました。企画はB群製品を製作することで今までチップになっていた材が製品販売として川上・川下にお金が落ち、またB群製品を購入し貸し出しすることでA群製品（建材等）のメンテナンス費を捻出する想定です。実施実績は、「大阪都心密集市街地木材循環モデル（寺田町プロジェクト）」のエントランス天井、軒天板材等（A群）やエントランスウッドデッキ、ベンチ、サイン等（B群）に活用しました。さらにB群製品を活用した開発製品として屋台、おもちゃ等を制作しました。開発製品制作後製品群のビジネスモデル普及のためにフィールドテストやヒアリング、アンケート調査を行い、本PJのパンフレットを作成しました。今後は、「顔の見える木材のサプライチェーンの構築」に向けた体制構築や開発製品群の販促計画等の検討予定です。※本PJの使用材の一部は令和3年8月に仮設置された「スマートアンブレラデザインコンペ」大賞作品使用材を活用しています。

※この業務メンバーは（一社）大阪府木材連合会、（株）南河内林業、（有）田中製材所、場とロト LAB、sunikov、大室組まこと建設株式会社、アルパックで構成されています。

なかもずイノベーションセミナーを開催しました

山部健介：

地域産業イノベーショングループ

なかもずを漢字で書くと「中百舌鳥」ですが、関西以外の人にとっては、なかなか読みづらくありません。

ご存じのとおり、なかもずは大阪メトロ御堂筋線の終着（始発）駅であり、南海高野線と泉北高速鉄道の「中百舌鳥駅」も合わせると、3つの鉄道が乗り入れる交通結節点です。堺グラン

ドデザイン2040において、なかもずは大学や企業等の最先端テクノロジーが融合した新時代の産業クラスターを目指すとしており、イノベーション拠点化に向けた取組が進められています。

今年度、アルパックではなかもずのイノベーション拠点化に向けたロードマップ策定等を支援しており、その一環として、なかもずイノベーションというイメージ形成を図ること及び機運醸成を目的に「なかもずセミナー」を開催しました。

今回のテーマは、「なかもず×最先端」として、大阪府立大学や大阪市立大学（2022年4月、大阪公立大学として

なかもず × 最先端
イノベーションセミナー

令和4年2月2日（水）
14:00-17:00（受付13:30）
開催形式：会場及びオンライン併用（Microsoft Teams使用）

主催：NANOZUイノベーション創出推進コンソーシアム
【対象】府内外の企業や大学・研究機関、支援機関や金融機関、学生など
【定員】50名（会場）※申込み先着順
【会場】（会場）堺市産業振興センター5階 コンベンションホール
※新型コロナウイルスの感染状況により、開催形式及び定員について変更させていただく場合があります
※オンライン参加費については、申込み後、個別に案内方法を案内させていただきます

【講師】
◆基調講演
大学 大阪府立大学 名誉教授 山部 健介氏 新たながん治療「BNCT」
◆先端技術紹介
大学 大阪府立大学 教授 石島 寛明氏 再生可能エネルギーの安定供給
大学 大阪市立大学 教授 天尾 聖氏 未来のエネルギー「人工光合成」
企業 株式会社未来 代表 坂本 龍雄氏 「光」による次世代コミュニケーション基盤

統合）の最新技術シーズを紹介するとともに、NTT西日本からは次世代コミュニケーション基盤「TOWN」（アイオン・Innovative Optical and Wireless Network）をご紹介いただきました。バイオ・医療やエネルギーソリューション、情報通信プラットフォームなど、多岐にわたるテーマのご講演で、視聴者からも大変好評な感想をいただきました。

今回のセミナーは第1弾ということで、なかもずイノベーションというイメージづくりに向けて、今後もこうしたイベントを継続的に実施していくことが求められます。なかもずのまちがイノベーション拠点として、少しずつでも変わっていくことを期待しています。

J R吹田駅前発、ファンを創造しエリア価値を高める実践現場レポート

絹原一寛：
都市・地域プランニンググループ



ビレッジマーケット

毎月、第一日曜日に駅前のさんくす夢広場で開催されている「ビレッジマーケット吹田」。地元と繋がりのある飲食店やこだわりのあるハンドメイド雑貨店が集まります。コロナ禍でも感染対策を講じながら続けて、はや2年。直近の出店者数は40を超え、

商圏の概念はネットの台頭で消滅、駅前商業地は求心力を失い住宅地化が進みます。駅前が「わざわざ行かない、行く魅力もない」場所になりつつある中、J R吹田駅前で新たなファン・魅力を創る動きをレポートします。

皆さんは「J R吹田駅前」と聞いて、何を思い浮かべるでしょうか？アサヒビール吹田工場はすぐ出てきても、その次は・・・？大半の駅前は外から見るとこのような状態ではないでしょうか。

運営に携わるのは「じやない吹田」。J R吹田駅前は1300年以上も歴史がある旧吹田村にオリジンがあり、今でも高浜神社、浜屋敷など歴史を感じるスポットが点在しますが、吹田は千里ニュータウン、万博公園など「シュツとした」イメージ・・・そう「じやない吹田」を目指して有志で立ち上げた団体です。昨年からは新旭町通商店街内の一角に常設の「ビレッジマーケットショップ」をオープン。出店者さんが交代で店番し、マートで出品している雑貨を販売しています。「新しい客層、ファンを作るきっかけに」「出店者の女性たちがやる気になって、いろんな工夫を凝らしてくれている」と、じやない吹田の生田謙一郎さんは語ります。



ビレッジマーケットショップ

演奏が始まりました。実は、J R吹田はジャズのライブハウスが3つも集まるスポット。名うてのプロミュージシャンのギグが繰り広げられる音響も優れた大箱「TAKED EYE」に加え、ベーシストの佐野さんが店長を務めるコンパクトでアットホームな「Musicbar ケセラ」、そして昨年新たに駅前ビルの5階に「Livebar ケセラ」がオープン。ケセラはいつでも先の生田さんがオーナー。関西で随一の最高峰ハモンドオルガンB3が入るハコで、オルガンのレジェンド佐々木昭雄さんや、東京と大阪との2拠点で演奏活動をしているオルガン奏者優季さんがライブを繰り広げます。毎回オンライン配信も組み合わせ、遠方からでもファンと繋がるスポットに。

3月には音楽でJ R吹田を笑顔、元気にしようとしてこれらのライブハウスがコラボした「MUSIC SMILE」を開催。J R吹田でこのラインナップ!?という豪華なミュージシャンが集結しました。

この数年、コロナの打撃で厳しい状況ですが、一方で新たな店舗の出店も増えてきました。歴史ある吹田村に新風を吹き込むこれらの動き。理解を得ていくのは大変なのですが、エリアの若手も変化の兆しを感じ、議論を始めています。「じやない吹田」を楽しむ人の輪が広がり、新たなレイヤーがさらに積み重なっていくのを、楽しみに見守っていきたいと思います。



Livebar ケセラのライブ



当社は、平成30年度に大阪府の「商店街等エリア魅力向上モデル事業」でJ R吹田駅前のエリア戦略作成とエリア価値向上の体制や事業構築をお手伝いしました。その後、地元のメンバーで取り組みを継続・発展させておられます。

第1回シティプロモーションアワード

野口和雄
東京事務所

昨年12月24日に第1回シティプロモーションアワード表彰式が開催された。同実行委員会（東海大学教授河井孝仁委員長）によれば、従来、知名度獲得にとどまっていたものを、「説明できる戦略性があるシティプロモーション」を行っている自治体を顕彰することが狙い。35の応募から金賞を受賞した神奈川県中井町の活動を紹介する。

中井町は、神奈川県西部にある人口約1万人の小さな自治体だ。鉄道駅や有名な観光地がないことから知名度は低い。近隣の町で育った私もどこにある町か知らなかった。その町が、地方創生が契機となり、総合戦略を総合計画と一体的に町民参加で策定し、さらに事業を展開することによって活気づいてきた。総合戦略で位置づけたブランドプロジェクト（以下PJ）、スポーツPJ、拠点施設PJ、そしてシティプロモーションPJという中核となる4つのPJそれぞれに町民を主

体としたチームも立ち上げアクションを積み上げた。例えば、運動公園に地方創生交付金により建設した木造カフェの運営を地元女性グループに委ね、町民によるブランド、スポーツ、シティプロモーションの取組みの舞台にするなどはその一例である。そして担い手として町民グループが生まれ、NPO法人が設立されている。受賞理由（選評）では、戦略性のある活動とともに、幾つかのPJ担当課とシティプロモーション担当課と連携した取組みとなっている点は高く評価できるとしている。



適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

41回 2021年
12月15日

「コンパクトシティ・ウォークブルシティの考え方から見てくるまちづくりの姿～地方都市における実践を例に～」

講師 福井大学学術研究院建築建設工学専攻教授
野嶋 慎二氏

第41回は野嶋慎二氏をお招きし、氏の都市デザイン考の指針であるとなるコンパクトシティや拠点のビジョンについてイギリスにおける多様な事例を題材にイメージを共有いただきました。また、イギリスと日本の都市計画の制度や考え方の違いや課題を整理しつつ、日本の地方都市における「コンパクトシティの拠点づくり」について事例や自らの実践を踏まえ、お話いただきました。

都市拠点として定められた大きな拠点に加えて、その間を埋めるように市民活動レベルやスケールの小さなボトムアップの拠点を、生活やコミュニティの重要な拠点として位置付けていき、多様なスケールで拠り所が存在すべきであるというお話は、従来の「コンパクトシティ」という言葉から連想される拠点像よりも、より解像度が高い印象を受けました。

「地方都市にはまだまだ課題がたくさんある」としながらも、コンパクトシティや拠点像という大きなビジョンと、ヒューマンスケールの2つの視点をもって「暮らしやすいコミュニティの実現」や「人が気持ちの良い空間」を目指し、ひとつひとつのプロジェクトを実践していく過程は非常に勉強になりました。追隨していきたいと思います。（高瀬咲）

42回 2022年
1月25日

「場所の記憶～大阪東部今里界限 地域基盤をつくった戦前期まちづくりに学ぶ～」

講師 都市プランナー 竹内 陸男氏

第42回適塾路地奥サロンは、都市プランナーの竹内陸男氏をお招きし、氏が生まれ育った大阪東部・今里界限（旧神路村界限とその周辺）における戦前期を中心としたまちづくりについてお話いただきました。

講演では、時代背景や大阪市全体のまちづくりにも触れながら、今里界限のまちづくり史や面的市街地整備の取組についてご紹介いただきましたが、その内容は多種多様で、とてもユニークなものでした。大規模な河川改修に貢献した耕地整理や花街地形成を目的とした区画整理など現在では考えられないような事業もあれば、受益者負担の考え方により換地評価を行った区画整理などこれからのまちづくりにも生かせそうなエッセンスのある事業もあり、まちづくりの豊かさ、柔軟であることの重要性を感じました。

今回のサロンは、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、残念ながら完全オンラインの開催となりましたが、竹内さんの講演を聴きつつ、Googlemap上で今里界限を歩き、束の間の時間旅行にでかけた気分になりました。コロナ禍で旅行がしづらい今、どこか遠くの地域ではなく、身近な地域の歴史を知り、過去に出かけてみるのもおもしろいのではないのでしょうか。（山本貴子）

※竹内氏の書籍は、レターズ230号で紹介しています。

近況 & イベントのお知らせ

都市デザインと専門家の関わりを考えるセミナーを開催しました

坂井信行

都市・地域プランニンググループ

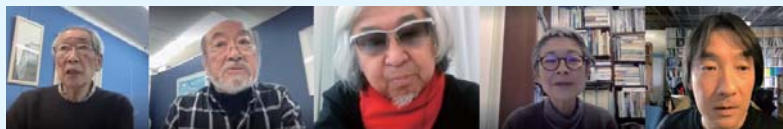
2月6日に、JIA 近畿支部の都市デザイン研究会によるセミナー「建築とまちの価値を高める都市デザインの手法—社会実装を目指して—」を開催しました。

従来、専門家が関わる都市デザインの手法として、デザイン調整などを統括的に行う建築家が参画する「マスターアーキテクト」、デザインの基本的なルールを示す「デザインガイドライン」、各分野の専門家が多角的な視点からコメントする「デザインレビュー」などが試みられてきました。これらは主に新市街地の整備などの機会に実践されてきましたが、これからは既成市街地の再生を主な対象としていくことが求められます。本セミナーは、建築とまちの価値を高めるため、専門家が関わる都市デザインの手法を広く社会に実装させていくことを目指し、これからの都市デザインと専門家たる建築家の関わりについて議論を深めるものです。

当日は、建築家でアーバンデザイナーの曾根幸一氏、建築家の南條洋雄氏、建築家で関西大学名誉教授の江川直樹氏、都

市計画家で神戸芸術工科大学教授の小浦久子氏、都市計画家で東京都立大学教授の饗庭伸氏という多彩なメンバーにご登壇いただきました。幕張ベイタウンやベルコリーヌ南大沢、浜甲子園団地などでの実践を振り返りつつ、議論は多方面にわたりました。

中でも印象に残ったのは、専門家が目指す都市デザインが市場の嗜好によって変化してしまうという話題でした。沿道型の街区を目指していた幕張ベイタウンも、後期にはデベロッパーの「売れる住宅」づくりのため通常のバルコニーの集合住宅が供給されたとのことでした。「売れる」あるいは「稼げる」都市デザインが求められる一方、市民も「見る目」を養っていく必要があります、そこにも専門家の役割があるのではないかと思います。※都市デザイン研究会は筆者が代表を務めています。



左から曾根、南條、江川、小浦、饗庭各氏

九州

「新たな日常に向けた準備」

九州事務所 山崎裕行

2022年になり早3カ月、新年度も直ぐそばという中であって、事務所周辺も変化が見られます。新型コロナウイルス感染症は、今後も変異を続けていくでしょうから、否が応でもウィズコロナの認識のもと、いろいろと進めないといけません。

変化①事務所の周りは、夜9時過ぎには真っ暗。屋台も人もいません。やっぱり寂しいものです。

変化②駐車場が事務所ビル、マンションに変わっています。天神ビッグバンが進行中ですが、一方で空室、空家は増加中。もやもやが晴れません。

変化③オンラインミーティングが広がり、冷蔵庫の中がすっからかん。なぜならば、出張があれば、そのまちの美味しいものを買うのが常でしたが、その機会が激減。

これらも新たな日常として受け入れながら、新しい年度は更に感染症対策を徹底し、より明るく、楽しいものにしていきます。九州にお越しの際は、是非、お立ち寄りください。



建築が進む天神ビジネスセンター

京都

「京都でジビエ」

京都事務所 廣部出



中山間地域での獣害の問題がますます大きくなる一方で、有害鳥獣のジビエ利用が進んでいます。農林水産省の資料を見ると、平成28年度の食用ジビエ利用量1,099tが平成30年度には1,496t。実感としても、都市部でのジビエ料理の扱いが増えています。京都市では、四条烏丸を中心にさりと地図検索して20件ほど出てくるでしょうか。有名どころでは、老舗の牡丹鍋屋さんとか総長カレーを出す生協食堂とかですね。

そんななか、京都事務所から徒歩15分くらいのお店に行ってきました。獣肉とオーガニック野菜がどれもおいしい。昔から、シカ、イノシシ、クマ、ヘビなどあれこれ食べてはきたけれど、アナグマは初めて。旨い肉と脂でした。連れて行ってくれた人は、前回にハクビシンを食べたとか。まだまだ未知の世界が広がってますね。

※この肉は、渡邊美穂も食べています。





中村孝子：
企画政策推進室

ま
ち
か
ど

トイレだってりっぱな観光資源

1981年に大学のゼミ企画の中国ツアーに参加した。当時は、みんな人民服で厳しい観光規制がしかれ自由に行動することや写真撮影もできなかった。

初めて触れる異国の文化はすべてが刺激的で、特に街中にある公衆トイレに衝撃をうけた。煉瓦づくりの建物は、男女に分かれているが、中は仕切り壁がなく溝があるだけ。みんな一列に並んで用を足すというものだった。授業で知っていた猪屎(ちんぽ)トイレの下に豚小屋がある落下式トイレに遭遇しなかったのは残念だったが、旅行中の私の関心事は、トイレに集中したことはいうまでもない。例えば、広大な天安門広場を誇らしげに説明するガイドに「大人数

の人が集まるときにトイレはどうするのか」と質問するといった具合に。答えは広場の下に鉄板付きの溝があり周囲に壁の囲いをしたら即座にトイレになるものだった。以来、海外に行くとき必ずトイレをチェックするが、当時ほどの衝撃はない。

さて、話題は変わるが、昨年東京にいった際、友人に渋谷区に公共トイレを活用した面白いプロジェクトがあるので、ぜひ見るべきと案内された。プロジェクト(THE TOKYO TOILET)は、区内の17箇所の公共トイレを生まれ変わらせるもので、安藤忠雄、隈研吾、佐藤可士和、坂茂などのクリエイターの作品がある。

私たちが何気なく使っているトイレは、海外の旅行者にとってハイテクだけでなく清潔でキレイと評価は高い。プロジェクトはそんなものでない。プロジェクトはそんなものでない。プロジェクトはそんなものでない。

写真上：鍋島松濤公園(隈研吾)
下：神宮道公園(安藤忠雄)

をつく斬新なデザインは、まちをアート空間に変貌させる。公園の緑と調和する素材やRC打ちっぱなしのクールな曲線、スタイリッシュな照明デザイン、かわいらしいピクトサイン、わくわく感はマックス状態になる。そして、土地勘が全くない場所でも限られた時間内に観光しながら、効率よくトイレを目指すという意欲にかられる。時間枠と



透明トイレ(坂茂)：
入室後は内部が見えない



写真上：佐藤可士和デザインのピクトサイン(全作品共通)、写真下：円山公園内のトイレ

地図にパズルを埋め込んでいくような面白さがある。特にくらがりの中に浮かび上がるライトアップされたトイレは、見事な演出で、夜間にわざわざ行く価値がある。トイレだって立派な観光資源でまちづくりに一役買っていると感じさせられた。プロジェクトは、現在も進行中で2022年には全部完成する予定だ。コロナが終息すれば、残りのトイレを再訪するつもりである。

余談であるが、京都の円山公園(設計 武田五一)には、五一の作品の一つといわれるトイレが現存している。探してみたいが。

表紙写真：日本の棚田百選に選ばれた熊本県山鹿市の番所の棚田(撮影 山道未貴)

「レターズ アルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp E-mail: info@arpak.co.jp

本社・京都事務所

〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82 TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所

〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所

〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 ユニゾ内神田1丁目ビル4F TEL(03)5244-5132 FAX(03)6273-7715

九州事務所

〒810-0802 (株) よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パルビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

滋賀営業所

〒527-0012 東近江市八日市本町9-14 TEL(0748)36-2065 FAX(0748)36-2168

ホーチミン(ベトナム) No.187/7, Dien Bien Phu Street, Da Kao Ward, District 1, Ho Chi Minh City, Vietnam



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikitoペーパーを使用しています。